
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第25号 2018年3月

東北芸術工科大学大学院の理念。

Philosophy of the Graduate School of the Tohoku University of Art and Design

三瀬 夏之介 | MISE Natsunosuke

東北芸術工科大学大学院の理念。

Philosophy of the Graduate School of the Tohoku University of Art and Design

三瀬 夏之介 | MISE Natsunosuke

This paper try to introduce the idea of Tohoku University of Art and Design graduate school which celebrated 22 years since its establishment. We will explore the ideal image of our graduate school through “human resources image to cultivate” and “Academic Degrees of policy” newly formulated in 2012 after the East Japan Earthquake.

Keywords:

大学院、ひじおりの灯、公設民営、芸術立国 graduate school, HIJIORI light project, public privatization scheme, geijutsu nation

1. 大学院との関わり

東北芸術工科大学は日本初の公設民営方式の私立大学として1992年に開学し、大学院芸術工学研究科が1996年に、芸術工学研究科博士後期課程が2005年に設置された。



写真1 東北芸術工科大学(空撮)

私は奈良の芸術系高校からこの大学に赴任したのだが、遠く関西でもこの大学の地域に根ざしたユニークな教育内容を耳にする機会が何度もあった。少子高齢化に伴うコミュニティのリデザイン、過疎化や限界集落の出現などに伴う地方都市のリノベーションなど、デザイン分野において問題の露出しているここ東北は世界最先端の現場であり、ファインアートの分野においても、自己表現に止まらないリサーチやフィールドワークを重視した豊かな作品がこの大学から数多く生まれていた。

着任して間もない2009年6月から、東北芸術工科大学が協力しているアートプロジェクト「ひじおりの灯」(註1)に

参加するため、山形県最上郡大蔵村の肘折温泉に学生たちと共に入り込み、フィールドワークや聞き書きを通して地域の方々とコミュニケーションをとりながら灯籠と屏風作品を制作するという機会を得た。そこでの経験はそれまでなんとなく「アートシーン」と呼ばれる場所で「自己表現」を展開してきた私自身の作家活動に深い反省をもたらせるものとなった。



写真2 ひじおりの灯の様子

そのような都市部から遠く離れた辺境でのアートの可能性を模索していた2012年の4月より芸術文化専攻長の任を受け、東日本大震災以降の世界に対応すべく、本大学院が育成すべき人材像や学位授与の方針の策定、カリキュラム改革などにあたった。

2. 育成する人材像

本大学院修士課程は大きく分けて芸術文化専攻とデザイン工学専攻に分けられる。芸術文化専攻の定員が25名、デザイン工学専攻の定員が13名とコンパクトなため可能な、領域を超えた相互コミュニケーションが発生する授業カリキュラムやアトリエの設計が本大学院の特色でもある。

改革会議における幾多の議論を経て、芸術文化専攻の育成する人材像は、「人間の『精神』の充足に寄与する芸術の存在意義を探究し、文化の担い手たらんと研究・創作に取り組み続けられる人材」とした。

昨今の大学業界につきまとう実学志向に背を向け、人類史における芸術文化の意義を大きなスケールで把握し、小さな自己の世界観に留まることなく持続的な研究者として



写真3 大学院レビューの様子

作品制作を捉えられる作家を育て上げたいという思いからである。

デザイン工学専攻では、「現代社会が直面する諸問題の解決を図り、真に健やかな生活の実現をめざす、『用』のデザインを志向し、実践し続けられる人材」とした。

芸術文化専攻の「精神」に対して、デザイン工学専攻は「用」の観点から人間のための研究にアプローチする教育・研究を展開していくという強い願いが込められた。

二つの人材像は共に東北芸術工科大学の教育理念である「藝術立国」(註2)を土台としており、本大学院を修了する者は、学問・技術・制作のいずれを選択しようとも、その職業的態度の根本に「創造的なる〈人間のための研究者〉」であることを置くということが確認された。

3. 目指すべき大学院

合わせてディプロマポリシーに当たる学位授与方針の策定にもあたり下記のように決まった。

1. 芸術・デザインの歴史を学ぶ意味を理解し、その継承と進展を目的として、真摯な学究的態度で専門研究に取り組むことができる。

…「歴史理解に基づく専門研究の追求」

2. 人間社会と芸術・デザインの間を、論理的に検証・構築し得る、批評的態度と言語を体得している。

…「論理的思考と批評眼の習得」

3. グローバルな視野と同時に、足元の地域や自然環境への愛情を持ち、利他的態度で社会に貢献できる。

…「東日本復興をはじめとする、地域課題を解決するための研究をするという態度の醸成」

目指すべき大学院の姿の構築における議論では、均質化する世界から地域の存続を守るための自立性の保持といった問題に多くの時間が割かれた。「地域の自立」は「世界の多様性の保持」の基本であり、したがって国際的にも意義のある目標とみなせる。院生すべてに学問的な態度を要求し、研究・制作方法のサイクルを獲得させ、持続的な研究者兼技術者であるクリエイターとなってほしいという思いは、策定から5年経った今でも変わらない。

上記の理念を教育現場においてアクティブに展開する教員編成と環境整備の上で、地方に位置する本大学院では専門分化の弊害からの脱却を目指せるアーティスト／デザイナーの育成を目指している。

註

1. ひじおりの灯 <http://hijiorinohi.com>

2. 東北芸術工科大学【教育理念】

芸術を学ぶ若者に、人類危機の時代を克服しようとする強い意志をどう植えつけるか。

他者の痛みに想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために芸術の力を用いる姿勢をどう養うか。

困難な問題を解決し、社会を変革する創造力をどう身につけさせるか。

すなわち、「芸術家魂」をもった若者をどう世の中に送り出すか。

芸術立国とは、それを担う人の育成にほかならず、その教育こそが我々の大学のもっとも重要な使命である。

『芸術立国』より